
THE TABLET

ふによ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE TABLET

【Nコード】

N2809S

【作者名】

ぷによ

【あらすじ】

部屋でアキラと話しをしていた三奈。ふたりがキスを交わそうとした瞬間、彼は忽然と消えてしまった。

「見て見て。かわいいでしょう？」

三奈はアキラを呼んで、タブレットPCに映る姉の赤ちゃんを見せた。一才になったばかりの男の子、卓くんだ。

「確かにかわいいな……」並んだアキラが画面を覗き込んで笑った。「ちょっと、ここ触ってみて」

三奈が卓の頬を指さすと、アキラが恐る恐る画面を突いた。すると眠っている卓の頬が少し沈み、更にちよっかいを出すと、閉じられていた目が開いて、大きな欠伸をしながらもぞもぞと身体を動かした。

「ね？ おもしろいでしょう」

「ちょっと席代わって」と三奈から椅子を奪い、目覚めたばかりの卓の手を触った。すると笑いながら、小さな手がそれを握ろうとしてくる。

「よく出来てるなあ。なんなのこれ？」

実は三奈にもよく分からなかった。姉が卓が大好きな三奈の為に、「面白いわよ」と言って、自らソフトをインストールし、設定までして行ったのだ。

「あんまり、いじっちゃダメだからね。」そう言い残して……。

「赤ちゃんてさ、ホントにかわいいよね？」

意味あり気にアキラを見詰めると、画面の中の卓が泣き始めた。

” あらあら、卓くんたらどうしちゃったの……。 ” とすぐに姉の声が近寄って来る。抱っこした卓をあやしながら姉が画面から消えて行くと、泣き声も遠くなった。

お母さんも出掛けていて、今はこの家にアキラと自分しかない。アキラがPCの電源を切ると、部屋はさらに静かになった。

三奈の瞳を見詰め返したアキラの手が腰に回った。三奈が目を閉

じ、ふたりの唇が近付いていく。

「うわあああ……」

大きな悲鳴に驚いた三奈が目を開けた時には、すでに見えない力に首根っこを掴まれるように引き擦られたアキラが、勝手に開いた部屋のドアから外に消えて行く所だった。

呆氣に取られながら、三奈は彼の姿を呆然と見送る事しか出来ずにいた。

「……ア、アキラ？」

我に返って慌てて後を追いつけようと駆け出した時、目の前で突然閉じたドアに、勢いを止められなかった三奈はそのまま体当たりする格好になって尻もちを着いた。

「一体どうなってるの？」

すぐに起き上がってドアを開けようとしたが、いくら力を込めてもびくともしない。

「なんなのよ、もうっ！」

閉じ込められた形になった三奈は、尚もドアノブを回そうと必死に手を動かし続けた。

あ……。手で口を覆った本宮はなんとか叫び声を抑え込んでいた。職場の人間は誰も気付かなかったらしく、いつも通りの光景が広がっている。

一瞬でそれを確認した本宮は、すぐに視線を戻した。

何か嫌な予感がしてタブレットで映像を見てみれば、まさに三奈が見た事もない男とキスしようと目を閉じた所だった。

本宮は慌てふためきながらも、画面を埼玉の自宅の見取り図に切り替え、憎き男を示す人型のアイコンの上に置いた人差し指を三奈

から離すように動かしした。さらに部屋のドアを開け、家から十分に距離を取った路上で画面から指を離す。

そして男を追い掛けようと移動する三奈のアイコンに気が付き、急いで部屋のドアを閉じて、ロックした。まさに間一髪だった。

操作に慣れておいて本当によかった……。

取り敢えず危険な状況を乗り切った本宮は、背凭れに身を任せながらそっと息を吐いた。まったく油断も隙もあつたもんじゃない。

タブレットには、三奈がドアを開けようと必死になっている姿が映っていたが、本宮はそのまま映像を閉じた。

「部長、どうかしました？」

声に驚いて顔を上げると、庶務の女性が本宮を見詰めていた。

「ああ、ちょっと娘が危ない目に遭ってね……」

口から出てしまった言葉に、内心しまった、と思った本宮だったが、怪我でもしたのか、と彼女は心配そうに訊き返しただけだった。

「ああ、大丈夫。なんとか阻止したよ」

よく意味が分からなかったらしい彼女が口を噤むと、それに気付いた本宮は、「何か用だった？」と尋ねた。

すると肝心な事を伝えていなかった、と女性が急いでメモを差し出した。

「お客様がお見えだそうです。第三会議室でお待ちになられていると、受付から……」

「分かった、ありがとう」去って行く女性を確認し、再び画面を覗いた本宮は、懲りずに我が家に向かって移動し始めた男に気が付いた。

しつこいヤツだ……。再度男のアイコンに指を乗せた本宮は、地図を広域に拡大すると、今度は九州まで指を滑らせた。

これで今日は大丈夫だろう……。にやりとその顔が笑った。

長女に子供が出来、結婚して家を出たのは突然だった。本宮は心

の準備をする暇もなく、夫となった男に娘を奪われる形になった。自分がふたりの結婚式で流した涙は、決して感動したからではないのだ。まさに悔し涙だった。

今年大学生になった三奈も、やがて嫁に行くのか……。今すぐどうこうという事はないにせよ、そう思うと落ち込まずにはいられない。

三奈までいなくなってしまうたら、俺はどうしたらいいんだ……。例えばどんなに親バカと言われようと、本宮は三奈を手放したくなかった。

彼の決意は日を追う毎に固くなり、ついにこんな無茶まで始める事になった。

本宮の会社が開発したあらゆる物に対して遠隔操作が可能なこの製品は、法秩序を乱しかねないという理由で政府から使用を禁じられ、そのノウハウも含め厳重に管理されていた。

今もその使われ方の是非を巡って揉めている所だ。

しかしそこは自社の製品。持ち出そうと思えばどうとでもなる。

席を立った本宮はひと仕事終えたように陽気な気分になり、いそいそと資料を抱えて会議室へ向かった。

ここは、どこだ？

何かなんだか分からぬまま再び飛ばされたアキラは、着地した公園から繁華街を目指して歩き続け、やがて駅前らしい開けた空間に辿り着いた。

J R九州 HAKATA STATION。出来たばかりらしい真新しい駅ビルに貼り付けられたその文字を、アキラはただ呆然と見上げていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2809s/>

THE TABLET

2011年8月1日03時25分発行